

# 茅葺き職人―廣山美佐雄〔前編〕

筑波山と霞ヶ浦に囲まれた茨城県南部。

この豊かな農村地帯に、関東有数の

茅葺き屋根の集落・八郷地区がある。

ここで筑波流の茅葺き職人として

屋根の修復や技術伝承に奔走する

廣山美佐雄親方に、一人立ちするまでの逸話と

茅葺きの現状について話してもらった。



真冬の作業でも軍手は使わず、素手で葺く。固い茅を扱うため爪が割れることもあるが、「昔っから、手袋使ってる職人なんかいねえ」



国登録文化財に指定されている大場ぶどう園の茅葺き民家。江戸末期に建てられた。

## 「関東の茅葺き王国」

日本の里山、原風景に欠かせない茅葺き屋根。材料となる「茅」は茎に油分を含み水をはじくため、屋根を葺くのに適しており、雨の多い日本では特に重宝された。また断熱性・通気性にも優れ、内部で囲炉裏を使うと煙でいぶされて茅はより長持ちするという特性もある。

火気に弱いという欠点があることから、住宅が密集する都市部では早い段階で瓦葺きに取って代わられたが、屋根材の茅が容易に手に入る農村部では昭和中期まで各地で見られた。

現在は、世界文化遺産にも選ばれた白川郷の合掌造りが全国的に知られているが、関東近郊にも茅葺き屋根が多く残る集落がある。茨城県

石岡市八郷地区。筑波山の麓に広がる田園地帯に現在も七〇棟以上の茅葺きの民家や史跡が点在し、往時の姿を今に伝えている。

一般に屋根葺きの仕事は雨が降ると中止になるが、この地域は冬場好天が続くため、雪国で仕事がない東北の屋根葺き職人らが出稼ぎに来て地元の職人と技を競い合い、この地方独自の「筑波流」が発展した。また、温暖な気候と肥沃な土壌、大消費地・江戸に近いという好条件も重なり、古くから農業で財を築いた「豪農」が多かったことも一因と考えられる。

## 全て「見よう見まね」で身につけた

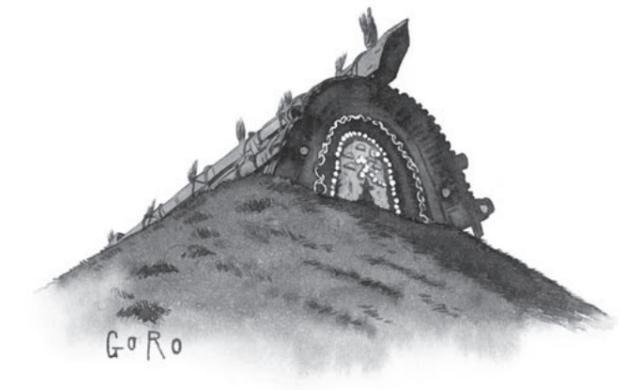
この「筑波流茅手（＝茅葺き職人）」の伝統技術を守り、六〇年以上屋根を葺き続けてきた茅葺き職人・廣山美佐雄。屋根を葺き替えるときは近隣農家が総出で手伝うのが当たり前だった時代、廣山親方も若いころから農業の傍ら茅葺きの仕事をしていたが、二四歳で婿入りした先で正式に職人になり、屋根に上がった。

「親父も茅手だったけども、いざとなればいつでも技術を捨てる覚悟で、他の人から教わった。といっても、親方は何も教えてくんねえよ。ただ見よう見まねで覚えていく」

「それでも二年もやったら一人で小さい屋根葺けるのが当たり前だったから。できなければ



ひろやま・みさお ●1931 (昭和6)年、茨城県行方郡 (現・行方市) 生まれ。父も屋根屋だったがその跡は継がず、婿養子に入った家に弟子入りして茅葺き職人となった。現在は「常陸風土記の丘」や「やさと茅葺き屋根保存会」で茅葺きの保存や技術育成にも従事。2012 (平成24)年には「現代の名工」として表彰される。茨城県小美玉市在住。



筑波流茅葺きでは屋根頂部の「棟」の両端を「キリトビ」と呼び、ここに独特な装飾を施す。大場ぶどう園では「松竹梅」が描かれている。

「仲間内でも競争があった時代。技術は教わるのではなく盗んで身につけるものだった」

だけで職人が七、八人。〆廣山一派だ。今はみんな七〇代で、茅葺き屋根が減ったときにみんな茅手の職人辞めちゃった。(仕事が増えた)今となってはやってもらいたいけれど、いったん辞めたらもう踏み出せない。勘が戻らないよ」茅葺きの技術は全国的な方法とそれほど違わないが、棟と軒先の納め方は筑波流ならではの腕の見せ所。キリトビ(棟の妻部分)や三面(軒

先の先端)の化粧は大きな特徴となっている。「今は葺き替えがほとんどで、下地から葺くとか化粧をやるつつうことはなかなかないけど、本来、屋根は勾配のつけ方一つ。そこで持つかないか決まっちゃうから」仕事仲間が減っていく寂しさをにじませつつ、この時だけは屋根の下地からすべて請け負っていた昔ながらの屋根屋気質が顔をのぞかせた。



右/今年82歳とは思えない身軽さで屋根に上り、茅を葺いていく。竹で組んだ足場は作業後に外す。左/集められた茅の束。屋根に上がる前に、葺きやすそうな材料を選んでまとめておく。

屋根葺きを使う茅のいろいろ

「茅」というのは屋根葺きに用いる草の総称であって、特定の植物を指すわけではない。「火小屋(炊事など火を使うための別棟)には小麦ワラ。母屋にはヤマガヤだ。ヤマガヤつ

筑波流茅手の人数は減る一方

「仕事始めたころは、自分のグループの親戚

『明日から来なくていい』って言われるだけ。今はそんなこと言えないけどね。だから苦勞しましたよ、夜も眠れねえぐらい」  
「サク」「イノチ」「ゲンテキ」「ヤゴ」「トミ」  
…この耳慣れない言葉はいずれも屋根屋の符牒(同業者間でのみ通じる隠語)で、それぞれ「茅」「旦那」「奥さん」「ご飯」「みそ汁」に当たる。  
「先輩たちが『サクがいっぱいあるからクニにしとけ』とか言うんだけど、当家(現場となる住宅)の人もわかんねえだろうけど、俺も最初は何言ってるのかさっぱりわかんねえよ(笑)。それも誰も教えてくれねえから、ずっとみんなの言うこと聞いて覚えてるしかなかったからね」  
「昔は仲間内でも自分の仕事をあまり見せなかったな。お茶の時間で下に降りるときは葺いたところを全部むしろかぶせて見えなくしたり。だから俺みたいな弟子は最後に降りるときにどんな葺き方してるかこっそり覗いてみて『こうやるのか』って。何とかこの道でやっていけると思ったのは、五年目、一〇年目ぐらいだな」

てのはススキのこと。昔はこれが一番多かった。今はシマガヤっていう細い茅を使ってるよ」かつては農地に適さない山の斜面などを集落共有の「茅場」として、毎年共同作業でススキを刈り集め、屋根葺きの材料としていた。今は植林などによって茅場が減り、また過疎化の影響で大勢でススキを刈ることも難しくなったため、刈取りや扱いが容易なクサヨシやカモノハシなど湿地帯に生える植物(通称・シマガヤ)を用いるようになった。平成十六年にはつくば市にある高エネルギー加速器研究機構の協力で「やさと茅葺き屋根保存会」が設立され、保存会メンバーやボランティアの手を借りて茅を調達している。  
「茅は十二月から一月にかけて集める。今年ほだいたい四〇〇駄(Ⅱ茅の束を数える単位)だったかな。今やっているこの家の葺き替えには七〇駄、六束で一駄だから、ここは四二〇束使うことになるな」  
「葺き替えは六月くらいまで。大場さんのあとはかすみがうら市の椎名家とか、大子町でも足場かけて待ってるところがある。みんな突貫工事だな(笑)」